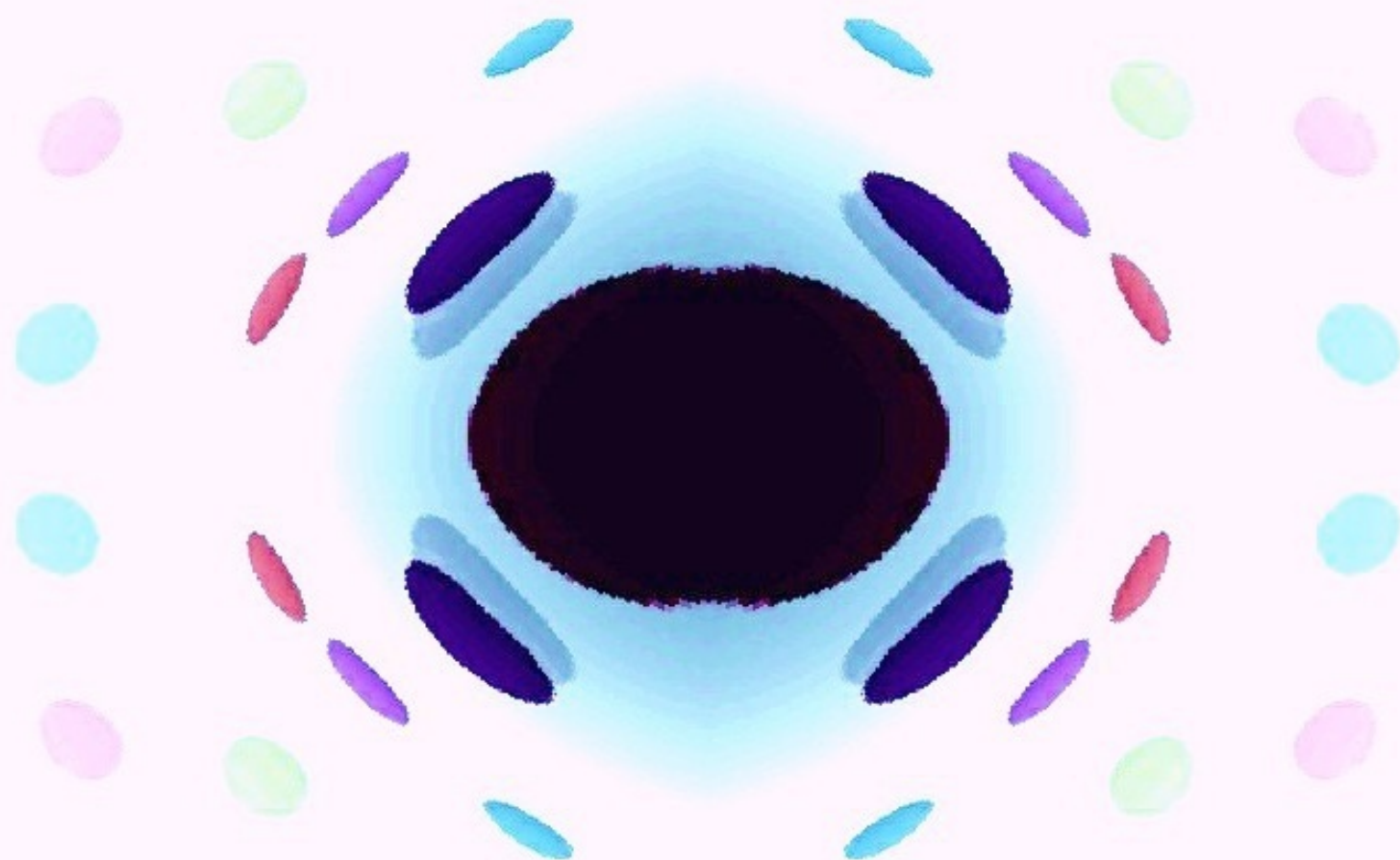
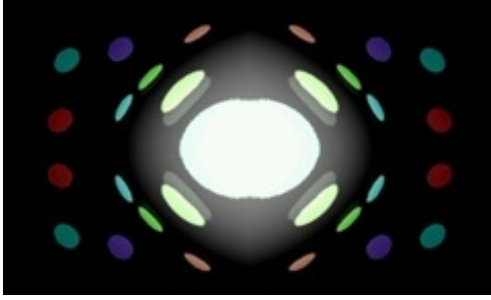


# 新宿 24丁目



mikatuki98



わたしはバスに乗っていた。

座席は中央の入口を境に前方左側。

二人掛けの窓際で通路側には誰も座っていない。

更に同じく、わたしより前方左側の座席には女子高生らしき若者が数人座っていた。

『わたしは一体どこへ行く為にバスに乗っているのだろうか？』

ふとそんな思いが心の中から湧いた後、ある学校の文化祭へ行こうとしていることが分かって来た。

分かって来たというのも変だが、『そうだったな』と記憶が不意に甦ったような感覚を覚えた。ところがわたしはその学校の場所をハッキリと知らないようなのだ。

それどころか学校の名前さえ浮かんで来ない。

そこで思いついたように、直ぐ前の席に座っていた女子高生の一人に訊いてみた。

すると彼女が言うには、わたしが今から行こうとしている場所は、なんと彼女たちが通っている学校らしい。

「新宿24丁目で降りたら目の前に乗り換え用のバス停があるから、そこで別のバスに乗り換えたら着きますよ」

『新宿24丁目？ 乗り換え？』

初めて聞く場所の名前を心の中で不安げに繰り返す。

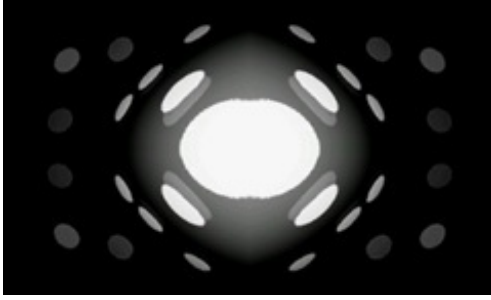
そして更に続いた彼女の説明によると、新宿24丁目が今乗っているバスの終点で、自分たちと同じ制服を着た学生たちが居る筈だから直ぐに分かるという。

『そうか…… 彼女たちも一緒なんだ…… なら安心か』

そう思ったのも束の間、彼女たちは学校をさぼってしまうのか、新宿24丁目に未だ到着していないのにバスに乗っていた女子高生の全員が違う名前のバス停でバスを降りてしまった。

『……とにかく、わたしは新宿24丁目で降りればいいのよ！』

紺色のタータンチェックのミニスカートと、ルーズに履かれた白ソックス姿の女子高生たちの足元をバスの窓から見送りながら、わたしはこのまま座席で耐え続けるしかないような心持ちでそのままバスに乗っていた。



女子高生たちがバスを降りてからどれほどの時間が経っただろう。

他の乗客のことなど一切目に入らないほど神妙に、ただ一点新宿24丁目という名称だけに意識を集中させ、その間の時間の経過などまるっきり覚えていなかった。

そして遂に終点の新宿24丁目に到着した、と思ったわたしはそのまま神妙な面持ちでバスを降りた。

するとバスのタラップから地面に足を着けるや否や、身体は何処かの改札口をスーッと通り抜けると、自分の意思とは関係なく見知らぬ広場に出ていた。

広場はバスセンターのようにたくさんのバス停があり、一体全体乗り換え用のバスはどこに並んで待てば良いのだろうか迷ってしまうほどに、その数がランダムに点在している。

『……確か、女子高生は乗り換え用のバス停は目の前にあると言ったわよね？ でも、この数の多さは何！？』

不審に思いながらわたしは乗り換え用のバス停をうろうろと探し始めた。

しかしバス停の数は探せば探すほど増えて行くような錯覚を覚える。

わたしは小走りに探し回ったせいで少しパニック状態になりかけ遂に足を止めてしまった。

すっかり途方に暮れてしまったのだ。

と突然、重要なことに気が付いた。

『あっ！ ココは新宿24丁目じゃない、まだ23丁目なんだわ……』

なんと終点の24丁目に着いたと思いこみ、バスを早く降りてしまっていたのだ。

『しまった！』

慌ててさっき降りたバスのバス停を探し回った。

ところが幾ら探しても24丁目行きと記されたバス停は何処にも見当たらない。

さっきと同じように探せば探すほど増えて行くような感覚。

わたしは24丁目行きのバス停を探し出すことにすっかり疲れて切っけてしまい、そんな肉体に呼応するかのよう、脳の思考も自分の周りの時間も完全に止まってしまった。

……いわゆる空白の時。

ところが、その空白の空から一矢の閃きが飛んで来た。

そして鋭い閃きがわたしを取り巻いていた全てをリセットしてくれたのだった。

『そうよ！ とにかく今来た道を辿って、元居た場所に戻ればいいのよ！』



戻ればいいと考えついた私が、実際に戻れる保証は何もなかった。

なにせランダムに並んだバス停で既に自分の居場所を見失っていたのだ。

ただ、この単純な閃きが乱れ切った心を救い、冷静さを取り戻したことによって、再びバスに乗るということに意識を集中させることに成功した。

つまり成功とは、次なる段階へと自分を導きバス停から思考はバス券へと移行していた。

『……そうだ……バス券』

そもそも初めに乗っていたバスでバス券なんて買ったのかどうかも、バスを降りる時にバス券で精算したのかどうかも記憶が定かでない。

しかし心の中ではバス券を買わなければいけないわ、と思い込んでいる。

そしてその思い込みが同じ思いの人間を呼び寄せたかのように、忽然と現れた見知らぬ人物がわたしの直ぐ隣で必死にバス券を探し始めた。

「ない、ない、ない……」

実際その人物が口に出して言っている訳でもないが、その慌てぶりから心の声がそう聴こえてくるような錯覚を覚える。

それに外見だけでは性別を判断し難いその人物は、まるでわたしの道中の連れであるかのように何故かぴったりと寄り添っているのだ。

波動がもろに伝わってきそうな距離。

『……にしても、一体この人は誰なんだろう？』

そんな疑問もさることながら、どうしてもバス券を探し出せない様子のその人物が気の毒に思えてきた。

すると気の毒だと思った念に感応したかのように、わたしの手には切手シートのようなシール状の物がどっさりと握られていた。

『あっ……これ……』

掌の大量のシールを見た瞬間、わたしいは自ずとシールの使い方が理解出来た。

『なるほど！ このシールをあのカードに貼ればいいのね』

<あのカード>とはその人物が手に握っていたハガキ大の紙のことで、シールが手の中に現れてからわたしお視界に入ってきた物だ。

わたしはカードを見て、咄嗟にシールを分けてあげようと思った。

『あの……あなたが探されている物はコレじゃないかしら？ 良かったらどうぞ』

するとその人物はわたしが差し出したシールを無言で受け取ると、自分のカードにシールを貼り始めた。

しかしあと数枚で全面を貼り終えるところで、何故かその人物はシールを貼ることを止めてしまった。

『ん？ 全部貼らないのか……』

ところで、その様子を見ていたわたしにも、実はいつの間にか左の上着のポケットに自分用のカードが入っていた。

そしてカードにシールを貼ることで、どうやら元へ戻る改札口を通ることが可能になるらしいと分かって来た。

誰に説明された訳でもなかったが、そんな思いがふつふつと湧いて来たのだ。

『そうか…… 多分、行き先によって貼るシールの枚数が違うのね？』

わたしは未だシールを大量に持っていたにも係わらず、3枚だけをカードに貼った。

たった3枚とは連れの人物に比べて随分と少ない枚数だが、それ以上貼る気にもならないし貼る必要性も感じなかったからだ。

わたし達はお互いカードにシールを貼り終えると、更に別の改札口を一緒に抜けることになった。



『これで戻れる』

そう思って抜けた改札だったが、抜け出た場所にはバス停らしきものは見当たらなかった。それどころか駅の構内のような光景と、列車にでも乗り込むつもりなのか急いでホームに向かっているような人々の往来が目の前に鮮明に広がって来た。

『改札だから……駅？ いや、バスを降りてから改札を通るまでに駅なんて無かったわよね？』足を止め不審に思いながら、どうしたものかとあれこれ思案していると、耳元でふいに声がした。

「ではこれで」

『え？』

ハッと吾に還って辺りを見回すと列車がホームに到着したばかりのようで、人々の流れの一部がその列車に向い始めていた。

そしてその流れの中にチラリとコチラを向いた人物がいた。

『あれは……』

さっきまでわたしと一緒に居た見知らぬ連れ。

そして切手を貼ったカードを持参して共に改札を抜けたあの人物のようだった。

『さっきの声……あの人か…… それにしてもいつの間に……』

しばらく遠目にその人物を追っていると、足元の白いものが印象的にわたしの目に入って来た。

『白い……ソックス？』

今までどんな服を着ていたかなんて気にも留めなかったし、まるで記憶に残っていなかった。

それでもあの人だと分かったのも不思議だが、どうして白いソックスを履いているのだろうかという疑問に思ったその時だった。

自分の右手にはいつの間にやらビニール袋が握られていることに気が付いた。

何だろうと持ち上げてみると、中には白いソックスが入っている。

わたしはビニール袋の中のソックスを眺めていると、再びソックスの意味が理解出来た。

つまり列車に乗るにはこのソックスを履かなければいけないらしい。

そう理解出来た瞬間、往来の人々の殆どがビニール袋に入った白いソックスを手を持っていることに気が付いた。

そして白いソックスを履いた人々だけが列車に乗り込んでいた。

止まることの無い人々の流れ。

その人々と同じ物を手にしているわたし。

しばらく茫然と目の前の光景を眺めているうちに、沸々とある感情が込み上げて来た。

『履きたくない！』

わたしは白いソックスを絶対に履きたくないという強い思いを抱きながら、新宿24丁目に行かなければいけないと思っていたことも、その為に乗らなくてはいけないバスのこと、すっかり忘れていた。



ひんやりとした感覚。

玉砂利の上にいるわたしは白のソックスどころか、靴も草履も下駄も何も履いていない全くの素足になっていた。

白のソックスを履きたくないと強く念じた思いが、どうやらわたしを素足にしてこんな場所まで運んで来たらしい。

こんな場所……多分この玉砂利の一本道を進んで行けば鳥居が立っているんだろう。

そう思いながら遙か前方を見遣ると、一步も進んでいないのに本当に鳥居が見えて来た。

『それにしても静かだわ……』

いや、さっきまで居た場所だって騒音がしていた訳じゃない。

きっと人の往来に酔って騒々しく感じていただけなのだろう。

バス停の数といい、人間の数といい、数が多いと心までざわつく。

だから今は、自分以外の人間が見当たらないだけで心が落ち着く。

寂しいという感覚も無く、ただ静かに佇む。

『鳥居……神社？』

心が鳥居の向こう側に何となく惹かれ歩を進めようとした。

ところが素足には玉砂利が痛いと感じる。

「さて、どうしますかな？」

ふと耳元で老人の声がした。

『え？ わたしは……』

そう訊かれて本当は自分でもどうしたいのかわからない。

「やはり24丁目を目指しますかな？」

『え？ 24……』

すっかり忘れていた24という数字に、新宿24丁目のことがわたしの脳裏に甦って来た。

『そうだ！ わたしは新宿24丁目に向かっていたのよ。 だけど23丁目で……』

「なるほど、あなたは本当は24丁目には行きたくなかったようすな」

『あ、いえ、24丁目に行くつもりで……』

「でも、辿り着けなかった」

『はい……』

「では未だその時期じゃなかったということでしょう」



『その時期？』

「ま、いずれ誰にも来る時期ですが、時々あなたのようにせっかちさんがいらっしゃる」

『え？ わたしがせっかち？』

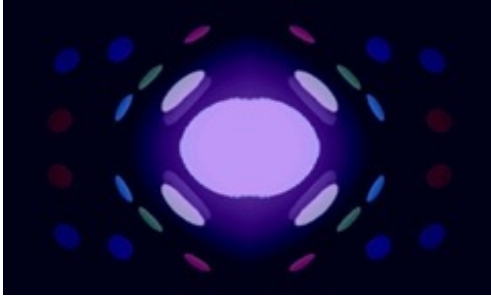
「ほほほほほ……それでは戻るお手伝いをしましょうか？」

『え？ 戻るって、24丁目に行くバス停へですか？』

「いえいえ、24丁目に行ってしまったら、もう戻れませんからね」

『戻れないって？ 何処へ戻れなくなるんですか？ それよりココは何処ですか？ あなたは誰ですか？ 姿を見せてください！』

「まあまあ、そうせかさないでくださいな、せっかちさん。 ほほほほほ……」



老人の笑い声と共にわたしの脳裏に浮かんで来たのは、小さな渡し場だった。

「あれがかの有名な矢切りの渡しですか.....」

『矢切り？』

「ま、矢切りというのは冗談ですが、ほほほほほ」

老人が再び笑うと、今度はかつて自分が通っていた高校の敷地が見えて来た。

そこは聖母マリアの白い像が学校のシンボルとして立ち、敷地の一部が森になっている清閑な学び舎だ。

上空から見たことは一度も無かったが、今こうして上空から敷地の隅々まで眺めている。

「お懐かしいようで.....」

老人の言葉に当時の感情が甦り、何かを言おうとしたが言葉にならない。

「言わずともわかりますよ」

そう言われて今度は目に涙が滲んできた。

「そろそろ見えて来ましたかな？」

老人の優しい声に涙を拭くと渡し場が見えて来たが、さっきの小さな渡し場とは違い学生や社会人で賑わっている。

『あそこは.....』

そう言えば、高校から近い場所に定期船の船着き場があった。

距離は大して離れていないが、瑠璃島という名の小さな島へは未だ橋が掛かっていなかった。

瑠璃島には一度だけ新入生歓迎遠足で行ったことがある。

その時乗った定期船は、船というよりも何だか大きなイカダにでも乗ってる気分だった。

しかしたった一度きりということもあってか、どんな島だったのか記憶にない。

これと言った印象に残る風景もなかったのだろう。

ただ船に乗って岸を離れる時の何とも言えない解放感だけが心地よく残っていた。

『そうだ！ わたしはいつもココから船に乗って逃避行をしていたのだ』

何が特に不満という訳でもなかったが、不満と言えば全てが不満で時折ふっと気持ちが遠くを彷徨っていた。

そんな時、いつも行き先は瑠璃島だった。

瑠璃という名前の響きとイメージが、想像力を掻き立ててくれていたのだ。

勿論、物理的に脚を運ぶ訳ではない。

ただひたすら瑠璃島へと心を馳せていたのだった。

「思い出したようですね」

老人の声にはっと吾に返ると、いつの間にやら目の前に一人の若者が立っていた。

『若い？ ……でも今までの声は……』

若者はニッコリとほほ笑むと先ほどの老人の声とは少しばかり違っていたが、やはり優しい声で言った。

「ははは、あなたが呼んだのですよ」

『わたしが呼んだ？ いえ、わたしは呼んだつもりなんて……』

「でも、先ほどから姿を見たいとおっしゃっていたでしょ」

『え、ええ、でもわたしは声の主の……』

「そう声の主です。あなたが心の中で若者だったら好いのになあと思った念がこのような姿にしたのですよ」

『そ、そんなこと……わたしは……』

「ええ、口にはしていませんが、一瞬そう思ったのですよ」

わたしはそう言われるとそう思ったような気がして来た。

おまけに前の若者が段々と初恋の人に見えて来たので思わず赤面すると、声の主だと言う若者が付け加えた。

「そうですね。 わたしの名前は新宿、とでも言っておきましょうか」



「えっ？ しんじくん？」

「ははははは……それは初恋の方のお名前ですかね？ 残念ながらわたしは今しんじゅく、と名乗ったんですよ。新しいの<しん>にお宿で<じゅく>」

「あっ、新宿ですか……」

赤面していた顔から今度は火が噴き出そうになった。

「おっと、笑ったりして申し訳なかったですね。 恋する心は魂の学びに大いに必要なこと」

「……あの」

「はい、待って下さいね。今から説明しますから」

「あ、はい。 教えて下さい。 どうして新宿というお名前なのか……」

「では、あちらでゆっくりとお話しましょうか。 さぁどうぞ、そのままでは足が痛いでしょう」

新宿と名乗る人物がそう言いながら足元に草鞋をおいてくれたのを見て、わたしは躊躇いもせずそれを履いた。

あの時、駅のホームらしき場所では白のソックスを履くことに対してあんなに抵抗があったのに、草鞋を出された途端、待ってましたとばかりに足が無意識に動いて履いてしまったのだ。

そんな私の様子を見ていた新宿と名乗る人物がニッコリとほほ笑んだ。

と同時にわたしは建物の一番天辺まで来ていた。

建物は円筒形なのか、ぐるり360度が見渡せる。

ただ何となく景色が微妙に細切れに変化して感じのに違和感を覚えた。

「……丁度24に分かれていましてね」

「24？」

「はい、ぐるり360度を24に分けると、まあざっと15度分が一つのお宿の景色と言ったところでしょうか」

「お宿の……景色？」

「ええ、判り易く言えば旅の途中で骨休めする場所がお宿。 お宿はそれぞれの想念の種類によって24宿に別れていて、それ相応の景色が見えるということです」

「……旅の途中？……わたしは新宿24丁目に行く途中…… で、あなた一体どうして新宿という名前なんですか？」

「わたしは新世界へ行く為の宿<新宿>の、いわゆる管理人といったところでしょうか…… 一

寸こちらへ移動して下さい。 この真正面が丁度24丁目にあたります。方角的には真北です。この24丁目の宿に3日以上滞在された方は、自動的にこの建物の真上にある入口から、いよいよ新世界へ移動するのです」



真上と言われて上を見たが、今居る場所が最上階で上にはただ空があるばかりだ。

「新世界？って、どういうことですか？」

「つまりは今居る世界とは別の世界。あなたも新宿24丁目を目指していたからには、新世界への願望がかなり強くなっていた証拠でしょう。ただ、結果的には拒否した」

「拒否って、白のソックスを履かなかったことですか？」

「そうですね。まあ、それは一つの象徴的な儀式のようなもので、新世界への第一歩を踏み出す為の標とでも言いましょうか」

「.....ところで、新世界ってどんな世界ですか？」

「それは行った方でないと..... ただ言えることは、あなた次第ということですね」

「わたし次第？」

「そう。あなたの心が欲する世界。ですからお一人お一人違う世界へ行くことにもなりますね」

「.....一人で？ 何だか寂しいわね.....」

「そんな心配はいりませんよ。あなたと同じような心の方々が既に沢山いらっしゃいますからね」

「え？ そうなの？」

「ただし、寂しい気持ちを持っていると寂しい世界へ行くので、寂しい感情に支配されている方々ばかりで、もっと寂しくなりますからね」

「え？ じゃあ、わたし寂しくない！」

「ははは、素直な方。では、そろそろ降りましょうか」

「え？ もう降りてしまうのですか？」

新宿と名乗る人物はスッとわたしの側から居なくなってしまうや、私の身体もいつの間にかいつも家路に着く為のバス停の前に立ちバスを待っていた。

いかにも会社勤めの帰りや学校帰りのような人も並んでいるせいか、今自分がココに居るのが当たり前のような気もするし、かと言ってさっきまで居た場所も現実のような気もする。

ちょうど目覚めた時に夢をハッキリとリアルに憶えているような感覚でいた。

すると何分も経たないうちに、いつも乗っている25番のバスが来たので乗り込んだ。

前方左側のいつもの席が空いている。

乗客の誰もが其処に座わる気配が無かったので座わり、わたしは車窓からいつもの風景をぼんや

りと眺めていた。

バスの乗車時間は20分ほど。

「次は北団地前です」

バスのアナウンスの声にチャイムを鳴らし降りる意思表示をして席を立った。

わたしの他には降りる客が居ないようだ。

北団地前に到着したバスは前方ドアが開けられ、わたしが定期券を運転手に見せて降りようとした時だった。

「ご乗車ありがとうございました。あと50年ですね、お客さん」

いつもは無言の運転手が声を掛けて来たのでハッとして振り返ると、その顔がさっきの夢のような世界で新宿と名乗っていた人物にそっくりだった。

『……あと50年？ ……今わたしは33歳 ……もしかして83歳で新世界行ってこと？』

了

## 新宿 2 4 丁目

<http://p.booklog.jp/book/39923>

著者 : mikatuki98

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tukinotenshi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39923>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/39923>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.